

学校長通信 No.20

ある保育園をお訪ねして

1 か月余り前のことになりますが、泉佐野市内のある保育園様をお訪ねする機会がございました。ご存知の方も多いかと思いますが、日根野高校は泉佐野市様と「看護医療専門コース」「幼児教育保育専門コース」の教育活動につきまして地域人材育成に関する協定書を締結しており（学校長通信 NO.13 参照）、市より様々なご支援をいただきながら、それぞれの分野のスペシャリストを育成すべく、日々活動しております。そのような中、本校の生徒達には保育園での現場体験の機会も多く持たせたいと考えており、先日私とその保育園様をお訪ねいたしましたのも、その為のご挨拶と下打合せを兼ねてのものでした。

その園は、近くの中学校の職場体験にも長くご協力されており、園長先生のご視点は幼児教育から中学生教育にいたるまでの懐の深いものでした。園長先生が言われるには、とにかく一日二日のことなので、体験させてあげられることは限定的。要は、「自由に幼児と遊んで、楽しませてやってね。」のひと声を中学生達にかけられるだけのようです。しかし、考えてみますとこれが生徒らにとってかなりハードルの高い要求で、「方法は任せるから、結果を出してよね（気遣いも遠慮もしない幼児たちに好かれなければならない）」という意味ですから、生徒にとっては何気ないのに結構きついプレッシャーになるのではないかと思います。果たして結果的に「しっかり幼児達に溶け込んで一緒に遊べる生徒」と「なかなかそれができない生徒」に分かれるようで、時間にして数分で仕分けられるようです。まったく幼児は無邪気というか残酷というか…。園長先生が言われるには、だからあなたは合格でこの仕事に向いている。あなたはちょっと向いてないかもね。というわけではないようですので、少し安心したのですが、それにしても言語力がなかなか通用しない状況下でのコミュニケーション能力の真髓を提示されたような思いでお話をお伺いいたしました。

園長先生は、来園した生徒たちに、幼児と上手にコミュニケーションが取れようと取れまいと、必ず感想を尋ねられ、「楽しんでくれてうれしかった。」か「受け入れられなくて辛かった。」という言葉を生徒達から引き出したうえで、「子どもらが受け入れてくれたらこんな嬉しいことはないし、受け入れてくれなかったらすごく悲しいよね。君たちが教わっている中学校の先生方もきっと同じ気持ちなんだろうなあ。」

と繋がれるようです。当然中学生たちは大きな「気づき」をもらうことになり、学校に戻ってからの授業態度に何らかの変化があるに違いないと想像いたします。この園の体験スタイルは、生徒を選ばないと言っておられましたので、どんな生徒がやってきても、同じ「気づき」を与えられるという園長先生の強い自信を感じることができました。

いかがでしょう。何気ない限りなく日常的な保育園でのひとコマであるにも関わらず、そこに何か通底することも達への愛情というものをお感じになられませんか。乳児・幼児から児童・生徒までをまとめて抱きしめてしまうぞ、というような園長先生の思いが伝わってくるようで大変感動いたしました。